

# 私立大学附属・系属高校生徒の学習に関する研究

## —大学進学ルートの違いに着目して—

沈 雨香<sup>CO</sup>・武藤 浩子<sup>CO</sup>

キーワード：附属・系属高校、大学進学ルート、選抜、推薦入学、内部進学、学習時間

**【要 旨】** 本稿は、これまでの高校教育研究、高大接続研究では顧みてこられなかった私立大学附属・系属高校を対象にして、私立大学附属・系属高校ならではの大学進学ルートが生徒の学習行動に及ぼす影響を探索的に検討するものである。

私立大学附属・系属高校から系列大学への推薦入学は日本独特の高大接続の形態であり、受験情報等で積極的に取り上げられることがあるものの、私立大学附属・系属高校での大学進学ルートと生徒の高校生活に関する実証研究は皆無に等しい。通常の選抜を経ない「内部進学」が可能な高校に通う高校生は大学進学に向けてどのように3年を過ごしているのだろうか。また一言で「内部進学」といっても、「内部進学」のための高校内での選抜の有無など、その内実は様々だと考えられる。そこで本稿は、附属・系属校生徒の大学進学に関する意識と学習行動について、私立大学附属・系属高校における大学進学を、①系列大学に全入する高校の推薦入学ルート、②校内で推薦選抜が行われる高校の推薦入学ルート、③校内で推薦選抜が行われる高校の一般入試ルートに分類し、附属・系属校の大学進学ルートによる生徒の学習行動等の差異について検討した。

選抜性の高い私立大学の附属・系属高校を対象として検討した結果、「内部進学」であっても大学進学ルートの違いが生徒の大学進学に関する意識や学習意欲、学習時間に影響を及ぼしていることが確認された。同じ系列大学への内部進学であっても、校内選抜を経るルートを取る生徒は、学習意欲が高く、高校1年生から学習時間も長い一方、全入で推薦入学する生徒は、学習意欲が高く、学習に面白さを感じているものの、学習時間は短い。他方、一般入試ルートの生徒は、3年生になって急に学習時間を増加させており、その学習時間は、大学受験の接近、また通塾に規定されていることが示された。本稿は、同じ大学の附属・系属高校であっても、生徒が進む大学進学ルートによって、生徒の学習意欲や、学習時間に差異が生じることを明らかにした。

### 1. 問題の設定

本稿の目的は、私立大学附属・系属高校特有の「内部進学」制度が生み出す大学進学ルート<sup>(1)</sup>と生徒の意識や学習行動との関係について検討することである。

これまで大学入試制度を扱った研究は、その多様化や背景、プロセスを中心に行われ（中村2000、2012）、推薦入試などの選抜・競争のない入試制度の是非をめぐる議論に焦点が当てられていた。これらの研究の問題関心は、その是非はともかくとして、日本の「教育と選抜の社会

史」の中心に位置してきた学力試験による競争と選抜の機能を前提に、「新しい学力観」が求められる「大学全入時代」における大学入試制度の在り方を検討するための試みであろう。他方、大学入試制度の多様化、特に学力試験によらない選抜が、生徒の高校生活に及ぼす影響に関する研究はまだ十分になされていない。中でも、戦前から日本の高大接続の一角を担ってきた私立大学附属・系属高校で学ぶ生徒、つまり、彼（女）らのために推薦入学枠が設けられ、高校に進学した段階で系列大学への進学がある程度約束されている生徒がどのように高校の3年間を過ごしているのかについてはほとんど論じられてこなかった。

私立大学附属・系属高校からの選抜競争を経ない、いわゆる「内部進学」制度を利用する大学進学ルートは、日本以外では例を見ない独特の高大接続の形態である（吉田 2011、p. 172）。しかしながら、日本に存在する附属・系属高校の数を正確にとらえた文部科学省報告すらなく、また附属・系属高校における学習に関する研究論文は管見の限り見当たらない。それとは対照的に、教育雑誌や受験生とその親をターゲットにした情報誌などでは、附属・系属高校が積極的に扱われている。附属高校入試に関するガイドブック<sup>(2)</sup>でリストアップされている首都圏の私立大学附属高校は73校あり、その数は、系属校を中心に近年増加の傾向にある（土田 2008）とされている。

附属・系属高校が増えている背景には、教育政策、私立大学側の思惑、また受験生・家族の要望の交差するところにあるといえる。まず、受験戦争への反省と「学力試験とは異なる能力や個性を測る風潮の拡大」の影響（中村 2012）により、推薦入学制度が政策的にも後押しされることがあげられる（中村 2000、p. 43）。1999年に文部科学省が発表した大学入学者選抜実施要項では、推薦入学枠の目安が3割から5割へと緩和されている。他方、大学側は「大学全入時代」において、安定的に優秀な学生獲得の手段を講じなければならない状況にある。私立大学の副学長を務めた土田は、系属校を増やすことになった理由について「指定校推薦の枠を提供するよりも系列化することで、当該高等学校の教育に全面的にコミットし、安定的に優秀な学生を大学に引き入れ」るためとしている（土田 2008、p. 40）。さらに、高大接続改革が示された2014年の中央教育審議会の答申<sup>(3)</sup>以降、今後の不透明な「大学入試」にある種の安心感を求める受験生や家族の間で内部進学が可能な大学附属・系属校の人気の高まっているとされる（安田 2021）。

このように、内部進学という特有な大学進学ルートを有するがゆえに、かつてなくその供給と需要が共に高まっている私立大学附属・系属高校であるが、実際附属・系属校の生徒の様子は卒業生や学校関係者の肌感覚によるもののみ（おおた 2016）で、ブラックボックスのままである。私立大学附属・系属高校は日本の大学、特に私立大学への進学をめぐる選抜競争のダイナミクスを構成する重要な一要素であることを踏まえると、未だ実証的な検討の試みがなされていないことが不思議に思えるほどである。

そこで本稿では、その解明に向けた第一歩として、私立大学附属・系属高校の生徒が希望する大学への進学方法、言い換えれば大学進学ルートに着目し、生徒の学習行動との関係について検討を試みる。

## 2. 先行研究と分析の枠組み

山村・濱中・立脇（2019）は、推薦入試、AO入試などの学力不問入試の普及が、高校生の学習意欲を削ぐという認識があることを述べたが、推薦入試の中でも、私立大学の附属・系属高校の推薦による系列大学への内部進学は、生徒の学習意欲を削ぎ、学習時間を減じさせるのだろうか。

高校生の学習意欲や学習時間に関して、これまで、進学多様校や偏差値に多様性のある高校群を対象として、出身階層や成績、高校ランクと学習時間との関連が明らかにされてきた（荻谷 2000、荒牧 2002）。荻谷（2000）は、学習時間を「努力の指標」と捉え、生徒の出身階層の影響が、学習時間で示される努力に影響を与えることを示した。荒牧（2002）は、学習時間を「学習意欲」と捉え直した上で、学習時間が高校偏差値や生徒の進路に関する志向に影響されることを示している。中村（2011）や西丸（2015）は、推薦入試を希望する生徒の学習時間は、一般入試を希望する生徒の学習時間より短いことを示したが、その差異は推薦入試希望者に進路多様校の生徒が多いことによる影響があることを示している。これらの研究は、多様な生徒・高校を対象とし、出身階層や高校ランク上位の生徒の学習時間は、下位の生徒の学習時間より長くなることを示してきたといえる。

では、高校ランク上位の「進学校」の学習時間や意欲は、どのような要因の影響を受けるのだろうか。有海（2011）は、地方と都市部の進学校を比較し、「学習意欲」と意味づけた学習時間が、生徒の進学志向性に影響されるとした。また、首都圏の公立進学校、公立進学中堅校を対象にした研究でも、進学中堅校と比べて進学校の生徒の学習時間が長く、進学したい大学の明確さが学習時間を増加させることが示されている（山村・濱中・立脇 2019）。濱中（2016）は、一般入試を経る進学校生徒を対象としたパネル調査により学年による学習時間の変化を明らかにした。1年生は約1.2時間、2年生は約1.3時間、3年生2学期は約3.4時間と、大学入試が近づくにつれ学習時間が増え<sup>(4)</sup>、「さぼることが絶対できない試験」が近づく3年生でようやく学習に取り組むはじめると指摘している。これらの進学校の研究では、一般入試によって大学進学を目指す生徒が対象とされており、推薦入試と生徒の学習行動に着目した分析はされていない。また、前述した中村（2011）や西丸（2015）においても、附属校推薦による進学者については、独立した分析対象とはされていない。

「学習時間」は、これまでの研究において「努力の指標」（荻谷 2000）と見なされるとともに、「学習意欲」（荒牧 2002、有海 2011）を表すものとして使用されてきた。学習意欲が削がれることで、学習時間が減ることは多々あるものと考えられるが、それとは異なり、学習意欲は高いものの学習時間は短い、ことも十分考えられるのではないだろうか。そこで、附属・系属校の生徒の学習時間の長短は、彼（女）らの学習意欲の高低と直接的に結びつけられるのか、本研究では、「学習時間」＝「学習意欲」とは捉えず、「学習時間」とともに「学習意欲」に関する変数を扱うことで検討を行う。その「学習時間」について、中村（2011）、西丸（2015）は、推薦入試を希望する生徒の学習時間が短いとしたが、私立大学附属・系属高校においても、系列大学への推薦入学を希望する生徒は、一般入試を受ける生徒よりも学習時間が短いのだろうか。また、私立大学附属・系属高校の生徒においても、山村・濱中・立脇（2019）が示したように、大

学進学が近づく3年になると学習時間が増える傾向がみられるのだろうか。

ここで私立大学附属・系属高校から系列大学<sup>(5)</sup>へのいわゆる附属・系属校推薦について確認しておく。私立大学附属・系属高校は、系列大学入学に関する選抜性で大きく2つに分類できる。まず、基本的に全員が推薦で系列大学に進むことができるいわゆる「エスカレーター式」の全入高校がある。全入の附属・系属高校では、附属・系属校推薦によって、ほぼ全員が同じ大学進学ルートを取ることになる。他方、附属・系属校推薦について校内選抜が課される高校においては、一部の生徒のみが系列大学に進み、他の生徒は一般入試や、他大学への推薦入試、AO入試などを選択することになる<sup>(6)(7)</sup>。

大学進学の見定時期について考えると、系列大学に全入する附属・系属高校では、高校入学時に大学進学が決定するが、校内で附属・系属校推薦選抜が行われる高校では、附属・系属高校であっても高校3年生になりようやく推薦で系列大学に進むルートを取るのか、それ以外の大学進学ルートを取るのかが決定されることになる。このように同じ大学の附属・系属高校においても、大学進学ルートは複数あり、その大学進学ルートの影響が、生徒の学習行動の違いとして現れるのではないかと考えられる。

そこで、本稿では、私立大学附属・系属高校を対象として、附属・系属高校生徒の大学進学ルートに着目し、大学進学ルートと生徒の学習行動・学習意欲との関連について検討する。なお、ここでいう附属・系属高校の大学進学ルートとは、①系列大学に全入する高校の推薦入学ルート、②校内で推薦選抜が行われる高校の推薦入学ルート、③校内で推薦選抜が行われる高校の一般入試ルートの3つのルートとする<sup>(8)(9)</sup>。

本稿ではこの大学進学ルートと生徒の学習意欲、学習時間の関係に着目し、次の視点から分析を行う。

- 1) 附属・系属校生徒の大学進学に関する意識や学習意欲は、大学進学ルートによって差異があるのか？附属・系属校推薦によって進学を希望する生徒の学習意欲は、一般入試の生徒の学習意欲より低いのか？
- 2) 附属・系属校生徒の学習時間は、大学進学ルートによって差異があるのか？附属・系属校推薦によって進学を希望する生徒の学習時間は、一般入試の生徒の学習時間より短いのか？
- 3) 大学進学ルートによって、大学進学に関する意識や学習意欲が、学習時間に与える影響は異なるのか？

### 3. 調査とデータ概要

#### 3.1. 調査概要

本調査は、首都圏にある私立X大学の複数の附属・系属高校を対象として行った。系列大学の選抜性が高くない附属・系属高校の場合、附属・系属校推薦制度により系列大学に進学する者は少ないと考えられる<sup>(10)</sup>。そこで本稿では、大学附属・系属校の特徴である内部進学を積極的に利用する生徒が多い、私立大学の中でも選抜性の高い私立X大学の附属・系属高校を対象とする。さらに、私立X大学は複数の附属・系属高校を据えており、学校ごとに異なる推薦枠を設けている。同じ系列大学の附属・系属校の生徒であっても進学ルートの違いによる分化が確認でき

る点も私立X大学の附属校を調査対象とした理由である。

調査実施にあたって、調査実施主体『グローバル時代における高大接続に関する研究』共同研究チーム（以下、筆者らとする）が各高校の教員等に調査協力の依頼をし、最終的に調査への協力が得られた学校は6校、うち附属・系属校推薦でX大学にほぼ全入する高校は3校であった。対象の6校はそれぞれ所在地（全入3校のみ関東地域）、共学有無（6校のうち5校が共学で男子校が1校）などの違いがあるものの、共通的な特徴として、6校すべてが受験偏差値上位のいわゆる「進学校」であること、そして、年間の学費が100万円ほどであることから、家庭の社会的背景（SES）が高いことが予想されることが挙げられる。

質問紙調査は、筆者らが調査票を各校に提供し、教員がホームルーム等で生徒に任意回答を求める形で実施された。調査時期は2019年9月から10月であり、調査内容は、当該校への進学理由、大学進学方法の希望（附属・系属校推薦、一般入試など）、授業以外の学習時間数、大学進学に関する意識（進学のために努力する必要があるか）、学習への意欲、学校外での学習活動などであった。

私立X大学の6つの附属・系属高校より4,081人の生徒から回答が得られた。悉皆調査が行われた5校の在学生徒数は4,122人（2019年度）で、調査表配布数4,122票、回収数3,932票、有効回答率は95.4%である。標本調査が行われた1校の回収票は149票と2019年度在校生の1割ほどであった。本研究では、そのうち有効回答票3,998人分のデータを分析対象とする。

### 3.2. データの概要

表1に示すように回答者は1年生から3年生までほぼ均等であり、男女比では男子が約6割と多い傾向がある。附属・系属高校への進学理由について複数選択で回答を求めたところ、最も多く選択されたのは「系列大学への優先入学」（63.8%）で、系列大学に附属・系属校推薦で入学できることが高校への大きな進学理由だと考えられる<sup>(11)</sup>。

また、附属・系属校推薦で系列大学にほぼ全入する学校（「附属・系属校（全入）」とする）（3校）と、系列大学への附属・系属校推薦者が校内選抜される高校（「附属・系属校（選抜）」とする）（3校）の大学への進学方法の希望を学年ごとに示したのが表2である。「附属・系属校（全入）」ではどの学年でも90%以上、3年生で95.8%が附属・系属校推薦を希望する一方、「附

表1 学年別男女比

学年	男子	女子	計
1年生	63.2%	36.8%	100.0% (N=1,442)
2年生	62.5%	37.5%	100.0% (N=1,313)
3年生	60.9%	39.1%	100.0% (N=1,243)
合計	62.3%	37.7%	100.0% (N=3,998)



属・系属校（選抜）」では、附属・系属校推薦を希望する生徒は1年生でも40.8%と4割程度にとどまり、3年生になると35.1%と下がる。「附属・系属校（選抜）」の一般入試を見ると、1年生の16.2%が3年生では32.8%と増えており、大学進学方法がまだ決まっていない生徒は、1年生の18.2%から3年生で1.5%に下がる。「附属・系属校（選抜）」の生徒は、3年生になると一般入試や、AO・自己推薦入試などに希望を決めていると考えられる。

### 3.3. 3つの大学進学ルート

これ以降の分析で使用する附属・系属高校の3つの大学進学ルートについて、表2に基づき確認しておく。「附属・系属校（全入）」の学校において「附属・系属校推薦」を希望する生徒が取るルートを「推薦（全入）ルート」とする。また、「附属・系属校（選抜）」において、「附属・系属校推薦」による進学を希望する生徒のルートを「推薦（選抜）ルート」、「一般入試」を希望する生徒のルートを「一般入試ルート」とする<sup>(12)</sup>。本稿では、大学進学ルートに着目し、「推薦（全入）ルート」、「推薦（選抜）ルート」、「一般入試ルート」という3つの大学進学ルートを取る生徒を対象として、彼（女）らの学習に関する意識や学習意欲、学習時間を比較、分析する。

表2 大学への進学方法（希望）

		附属・系属校推薦	一般入試	指定校推薦	AO・自己推薦	その他	まだ決まっていない	合計
附属・系属校（全入）	1年生	92.8%	1.5%	0.9%	0.1%	0.4%	4.2%	100.0% (N=806)
	2年生	94.3%	1.5%	0.8%	0.3%	0.4%	2.7%	100.0% (N=733)
	3年生	95.8%	1.4%	1.4%	0.6%	0.3%	0.6%	100% (N=718)
附属・系属校（選抜）	1年生	40.8%	16.2%	21.7%	2.2%	1.0%	18.2%	100.0% (N=628)
	2年生	36.7%	23.3%	18.6%	4.9%	0.7%	15.8%	100.0% (N=575)
	3年生	35.1%	32.8%	21.0%	7.9%	1.5%	1.5%	100.0% (N=518)
合計	1年生	70.0%	7.9%	10.0%	1.0%	0.7%	10.3%	100.0% (N=1,434)
	2年生	69.0%	11.1%	8.6%	2.3%	0.5%	8.5%	100.0% (N=1,308)
	3年生	70.4%	14.6%	9.6%	3.6%	0.8%	1.0%	100.0% (N=1,236)

## 4. 分析結果

### 4.1. 大学進学に関する意識

大学進学ルートによって、大学進学のために努力が必要だと思っている生徒の割合は異なるの

だろうか。大学進学のために勉強などをもっと頑張らなければいけないと考える生徒の割合を、大学進学ルート別に示したのが、図1である<sup>(13)</sup>。大学進学ルート間の差異を見るために、学年毎に $\chi^2$ 検定で確認したところ $p < .001$ と有意な差が確認された。

図1で一般入試を希望する生徒を見ると、1年生では約74.0%の生徒が、努力が必要と考えており、1年生と比べると3年生で5ポイントほど減少するものの、高校3年間を通して、努力の必要性を感じていることがわかる。推薦（選抜）ルートの生徒、つまり大学への推薦枠に限りがある附属・系属校で選抜のための競争を余儀なくされている生徒でも、努力が必要と考えるものは1年生に72.3%と高い。本データを疑似パネルデータとみるならば、2年になると約6ポイント減り64%に減少するものの、3年時になると70%に上がり、2年時にゆるんだ緊張感を高めていると見ることもできよう。一方、推薦（全入）ルートの生徒、つまりほぼ全員が系列大学への進学が保証されている附属・系属高校の生徒では、努力が必要と思っている生徒は1年生では36.8%程度と低く、学年が上がるとう進学のための努力の必要性認識が下がる傾向にある。系列大学への進学が「保証」され、「選抜」が行われないことが、彼らに大きな安心感を与えるとともに、大学入学が近づくにつれて、大学進学に向けて努力しようという気持ちが低くなるものと考えられる。

では、希望学部への進学についてはどうだろうか。推薦（全入）ルートの生徒にとっても、保証されているのは系列大学への入学のみであり、希望学部への入学については少なからず校内選抜が行われる。図2が示すように、希望学部へ進学するために努力が必要だと思っている生徒の割合は、その現状をよく反映している。

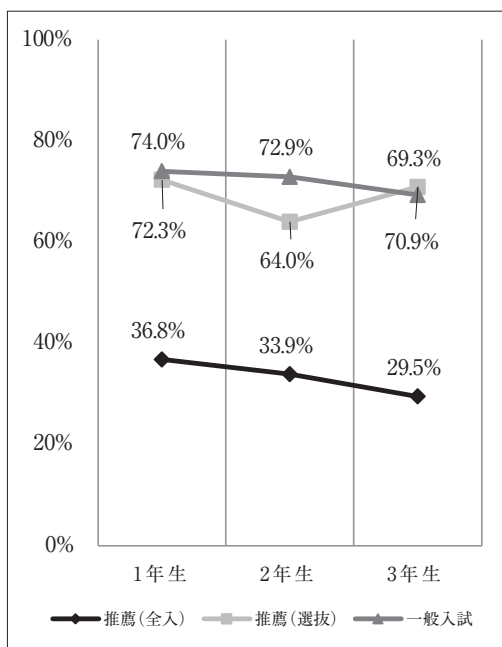


図1 第一希望の大学進学に努力が必要

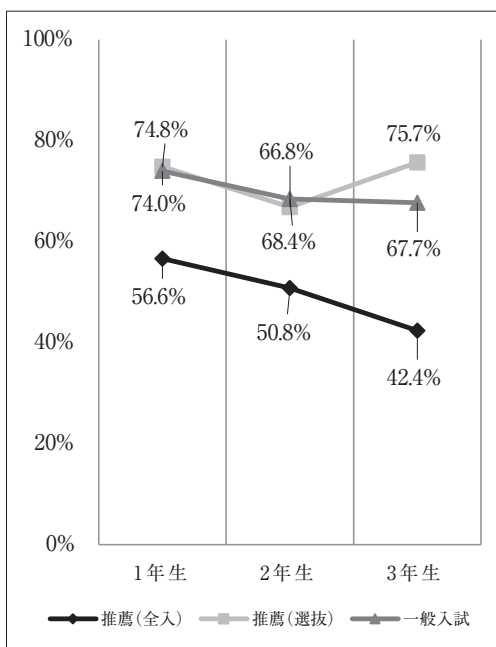


図2 第一希望の学部進学に努力が必要

推薦（全入）ルート of 生徒では、大学進学について努力の必要性を感じていた生徒は1年生で36.8%と3割程度だったが、希望学部への進学に関しては56.6%の生徒が努力の必要性を感じている。しかし、学年別に見みると、2年生では6ポイント下がり50.8%、受験を目前にした3年生では42.4%と半数を下回る<sup>(14)</sup>。これを疑似パネルデータとみれば、大学入学のための選抜がない生徒は、希望学部に入るために選抜があっても、学年が上がるにつれて努力の必要性を感じなくなっているといえるだろう。

一方、推薦（選抜）ルートと、一般入試ルートの生徒の希望学部進学のための努力の必要性は、3年間を通して70%前後と高く、大学入学のための努力（図1）と比べてもやや上がるにとどまっている。

これらの結果から、大学進学や希望学部進学に対する生徒の努力に関する意識は、推薦入試（全入および選抜）と一般入試の差異よりも、希望大学・希望学部進学における選抜の有無の影響を受けると考えられる。言うまでもないかもしれないが、ほぼ全員が系列大学への進学を当然視されている附属・系属校の生徒は、選抜を通る必要のある進学ルートの生徒と比べ、大学進学のために努力の必要がないと考えている。努力の必要がないと考えるだけでなく、学年があがるにつれて、ある種の安心感を持つ生徒が増えるのか、努力をしようと思う生徒の割合が減る傾向が見られる。

#### 4.2. 学習への意欲・面白さ

推薦（全入）ルート、推薦（選抜）ルートの生徒と、一般入試ルートの生徒では、学習意欲に差はあるのだろうか。前節でみた努力する気持ちの薄さは、学習意欲の低さに置き換えられるのだろうか。図3で示すように「教科学習への意欲」については、どの進学ルートでも、教科学習に意欲的な生徒は6割強から8割強と多く、進学ルート間で差はみられるものの、同じ進学ルート内では学年差はほとんど見られない<sup>(15)</sup>。学年集団による差異を考慮する必要はあるが、どの進学ルートにおいても、1年生が一番、教科学習に意欲的で、2年に少し意欲を下げ、3年に意欲を取り戻している様子が見える。

大学進学による努力の必要性を感じていなかった推薦（全入）ルートでも、約7割の生徒が教科学習に意欲的であると答えており、大学進学のための選抜がないことは、教科学習への意欲を減じるものではないと考えられる<sup>(16)</sup>。推薦（全入）ルートは、大学入試へのプレッシャー（努力の必要感）がなくても、教科学習へのモチベーションを維持していると考えられる。これは附属・系属高校入学に「選抜」を経た彼らにもともと備わっている素質なのか、附属・系属校の学びによる効果なのかは明らかではない。

ここで注目したいのは、系列大学への進学を望む、推薦（選抜）ルートの生徒である。学習意欲が一番高く、平均で8割の生徒が教科学習に意欲的に取り組んでいると答えており、一般入試ルートの生徒とは約15ポイントの差がある。また、一般入試ルートの生徒は、努力の必要性を強く感じつつも、教科学習への意欲は最も低いものとなっている。附属・系属校推薦のために選抜が課される生徒の意欲が高い一方、一般入試という選抜を通らざるを得ない生徒の意欲が低いことが示されている。附属・系属校推薦で進学する生徒の学習意欲は、一般入試の生徒の学習意欲



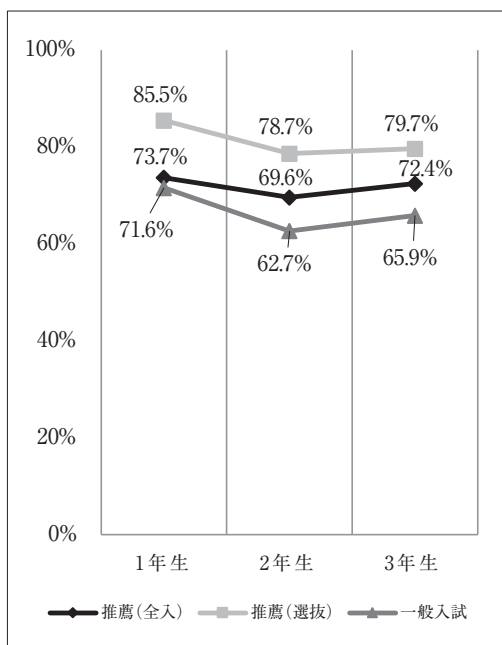


図3 教科学習に意欲的

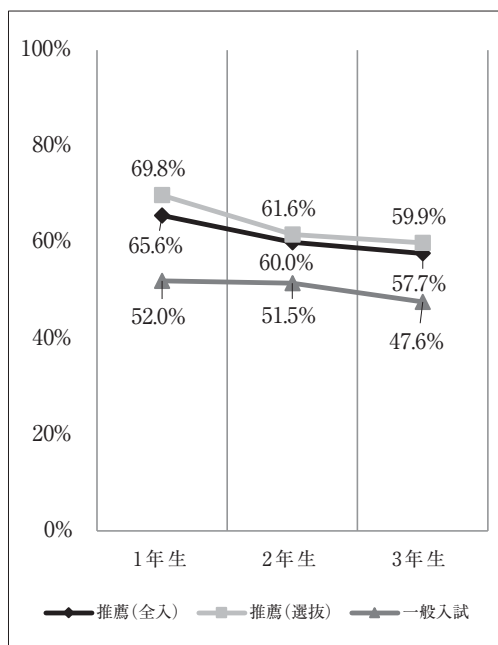


図4 教科内容は面白い

より低いとは言えず、大学入学者選抜がないことが、生徒の学習意欲を低減するとは言えないことが明らかになった<sup>(17)</sup>。

また、図4で示すように教科内容の面白さについては、推薦(全入)ルートと推薦(選抜)ルートにはほぼ差がなく、一般入試ルートはそれを10ポイント程度下回る結果となっている<sup>(18)</sup>。教科内容の面白さについても、教科学習への意欲と同様に、附属・系属校推薦で進学する生徒のほうが教科内容の面白さを感じており、大学入学者選抜がないことが、生徒の学習への興味を低減するとは言えないことが示された。

推薦(選抜)ルートの生徒は、大学進学への努力の必要性を強く感じ、教科学習への意欲が高く、教科内容を面白いと感じていることから、大学進学がある程度ポジティブなプレッシャーになっているのではないかと推測される。一方、推薦(全入)ルートの生徒は、大学入学のプレッシャーを感じず、教科学習への意欲も保持し、なにより教科内容の面白さを感じながら高校生活を過ごしているものと考えられる。

#### 4.3. 学習時間

前節では、教科学習への意欲、教科内容の面白さという学習への意識について検討した。本節では、学習への努力指標(荻谷 2000)、また学習意欲(荒牧 2002)とも意味づけられる学習時間について検討する。附属・系属高校の生徒全体では、平日の授業以外の学習時間<sup>(19)</sup>は約1.6時間、土・日は約2時間であったが、進学ルートによる学習時間の差は顕著である(図5、図6)。

推薦(全入)ルートの生徒は、3つのグループでは一番勉強時間が短く、1年生では平日で

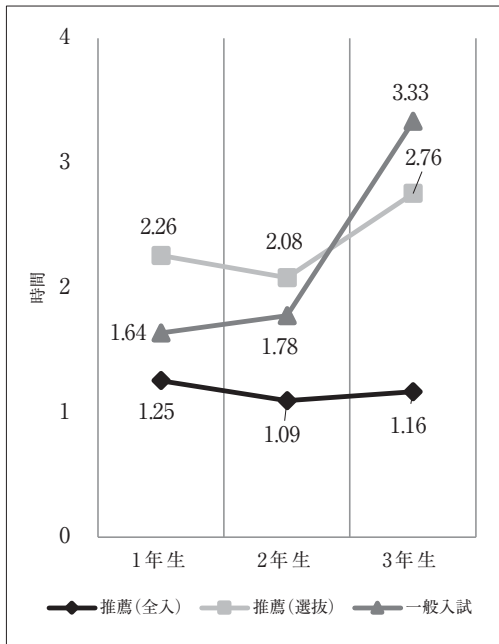


図5 平日の学習時間

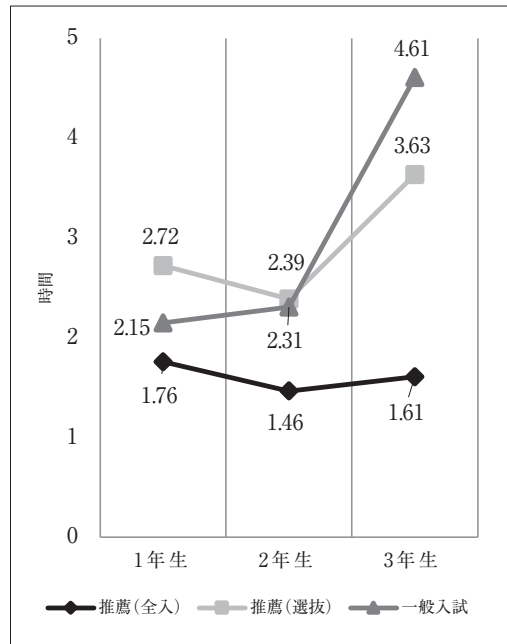


図6 土・日の学習時間

1.25時間、土・日で1.76時間であった。また、3年生で急に学習時間が伸びる他のグループに比べ、推薦(全入)ルートでは3年生になってもほとんど学習時間が増えない。平日、土・日ともに学習時間が一番長いのは1年生で、2年生で減少し、3年生でも少し増加するにとどまる。推薦(全入)ルートは、前節で確認したように、大学進学に対して努力をする意識が低いものの、教科学習への意欲も高く、教科内容を面白いと思っている生徒も多い。しかしながら、実際に授業外で学習する時間は短い。

一方、推薦(選抜)ルートの生徒は、平均では、平日2.3時間、土・日2.8時間と学習時間が一番長い。図5で示したように平日でも1年生で2時間以上自習をしており、2年時には少し下がるものの、3年生になると、平日2.76時間、土・日3.63時間と、推薦(全入)ルートの生徒の倍以上の時間、授業以外の学習をしていることがわかる。ここで注目したいのは、一般入試ルートの生徒よりも、高校内で選抜が行われる推薦(選抜)ルートの生徒の方が、1年生のときから熱心に授業以外の学習に取り組んでいる様子が確認できたことである。この結果から、推薦(選抜)ルートの生徒は、1年生の時から系列大学に附属・系属校推薦で進むという「目標」が意識化されており、それが学習時間を押し上げているとも考えられる。

一般入試ルートの生徒は、平日、土・日とも1年生より2年生が少し上がり、3年生になると急激に学習時間が増えている。これは、濱中(2016)が示した「地域の有力進学校」の生徒が示す学習時間と同様のパターンである。

これらの結果から、附属・系属校推薦によって進学を希望する生徒の学習時間は、一般入試の生徒の学習時間より短いとは言えないことが明らかになり、また、附属・系属校推薦であっても

選抜を経る生徒の学習時間は、1年生のときから継続的に長い傾向があることが確認された。

では、ここで確認された大学進学ルートによって異なる学習時間は、何に規定されているのだろうか。

#### 4.4. 学習時間の規定要因

前節までの分析では、大学進学ルートに着目し、大学進学への意識（大学進学のための努力の必要性）、学習への意欲・面白さ、学習時間について、学年別に検討した。しかしながら、これらの要因間の関連、特に学習時間の増加にどのような要因が効果をもつのかまでは示していない。そこで本節では、私立大学附属・系属高校の生徒の学習時間が、どのような要因から影響を受けているのか、大学進学ルートに着目しながら分析を行う。そのために学習時間を従属変数として、重回帰分析を行う。

本調査は、山村・濱中・立脇（2019）と同様に、学習時間については、「学習塾等での学習時間も含めた授業以外の学習時間」を聞いているため、学習塾等への通塾<sup>(20)</sup>を独立変数として投入し、基本的な変数である性別、学年も投入した。濱中（2016）は、「さぼることが絶対できない試験」が接近することでようやく学習に取り組みはじめる、と述べたが、高校生にとって「学年が上がること」は、「大学進学のための選抜が近づくこと」を意味すると解釈できよう。また、独立変数として、前節までで検討した大学進学に関する意識（大学進学のための努力の必要性、希望学部進学のための努力の必要性）、学習意欲（教科学習への意欲、教科内容は面白い）を独立変数として投入し<sup>(21)</sup>、従属変数を平日の学習時間とした重回帰分析結果を表3に示す。また、従属変数を土・日の学習時間とした結果を表4に示す

通塾は学習時間に影響を与えており、これは通塾による学習時間確保によるものと考えられるが、通塾の影響は一般入試ルートでもっとも大きい。また、「教科学習への意欲」は、どの大学進学ルートにおいても学習時間を伸ばすが、推薦（全入）ルートでその影響が大きい。また、学年（＝大学入学のための選抜が近づく）は、推薦（選抜）ルート、また一般入試ルートでは効果を示すことがわかる。一般入試の生徒においては、「大学受験が近いから、勉強しよう（勉強せざるを得ない）」ことにより、学習時間が増えるという傾向を見取することができる。

大学進学ルートを個別に見てみると、推薦（全入）ルートでは、大学進学への努力の必要性や、教科学習への意欲、教科内容は面白いという、生徒の意欲や興味が学習時間を増やしているといえる。「教科内容は面白い」と考えることが、学習時間を押し上げるのは、この推薦（全入）ルートのみである。また、学年が効果を示さないことは、大学入学のための選抜を経ないことによる学習行動の特徴を端的に示していると考えられる。さらに女子ダミーが効果をもつことから、大学進学という目標が無くても女子は男子に比べて、勉強時間を確保していると考えることができよう。

推薦（選抜）ルートでは、学年（＝選抜が近づく）が効くとともに、教科学習への意欲が効果を示している。なお、推薦（選抜）ルートでは、平日と土・日で、通塾や、大学進学への努力の必要性が学習時間に与える効果が異なっている<sup>(22)</sup>。

他方、一般入試ルートでは、学年（＝選抜が近づく）が、平日で $\beta = .367$ 、土・日で $\beta = .417$ と高い効果を示し、通塾も平日で $\beta = .325$ 、土・日で $\beta = .306$ と高い。しかしながら、推薦（全

表3 学習時間（平日）の規定要因

	推薦（全入）ルート		推薦（選抜）ルート		一般入試ルート	
	B	$\beta$	B	$\beta$	B	$\beta$
女子ダミー	0.090	0.042 *	0.123	0.058	0.062	0.018
学年	-0.042	-0.033	0.250	0.198 ***	0.698	0.367 ***
通塾	0.238	0.239 ***	0.041	0.049	0.362	0.325 ***
大学進学への努力の必要性	0.120	0.110 ***	0.083	0.070	-0.110	-0.061
希望学部進学への努力の必要性	0.009	0.007	0.019	0.016	0.260	0.143
教科学習に意欲的	0.338	0.243 ***	0.234	0.169 ***	0.309	0.162 **
教科内容は面白い	0.073	0.056 *	0.043	0.033	0.053	0.030
(定数)	-0.706	***	0.555	*	-1.500	***
N	2019		635		391	
R <sup>2</sup>	0.161		0.076		0.350	

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

表4 学習時間（土・日）の規定要因

	推薦（全入）ルート		推薦（選抜）ルート		一般入試ルート	
	B	$\beta$	B	$\beta$	B	$\beta$
女子ダミー	0.370	0.127 ***	0.128	0.040	0.184	0.041
学年	-0.056	-0.033	0.481	0.254 ***	1.071	0.417 ***
通塾	0.146	0.107 ***	0.134	0.108 **	0.461	0.306 ***
大学進学への努力の必要性	0.194	0.130 ***	0.370	0.209 **	-0.082	-0.034
希望学部進学への努力の必要性	0.026	0.015	-0.195	-0.105	0.299	0.122
教科学習に意欲的	0.512	0.269 ***	0.517	0.250 ***	0.399	0.155 **
教科内容は面白い	0.094	0.053 *	0.116	0.061	0.157	0.066
(定数)	-1.030	***	-0.836	*	-2.494	***
N	2008		628		389	
R <sup>2</sup>	0.159		0.157		0.392	

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

入) ルート、推薦（選抜）ルートで見られたような、大学進学への努力の必要性は効果を示していない。一般入試ルートの生徒の学習時間については、生徒個人が考える「大学進学への努力の必要性」よりも、濱中（2016）が述べたように「さぼることが絶対できない試験」の接近と、塾等での学習が、その学習時間の長さを説明すると考えられる。学習時間は、長いものの、その学習時間が、大学入試間際の追い込みと、塾に行くことで規定されるとすると、果たして、そのような学習時間を生徒の「学習意欲」として捉えることは適切なのか、という疑問が生じる。

## 5. 考察と今後の展開

本研究は、私立大学附属・系属高校を対象として、大学進学ルートに着目し、大学進学ルートと生徒の大学進学に関する意識や、学習意欲、学習時間との関連について検討することを目的とし分析してきた。大学進学に関する意識や学習への意欲、学習時間は、大学進学ルートによって差異があること、また附属・系属校推薦か一般入試かという二元的な視点でなく、附属・系属校推薦における選抜の影響も含めて検討する必要があることを示してきた。これまでの分析結果に基づき、以下、考察を行う。

まず、同じ私立大学の附属・系属高校における、附属・系属校推薦選抜の有無、また一般入試の選択が、生徒の学習への意識と学習行動に与える影響を3つの大学進学ルート別に確認してみよう。

今回の分析結果からは、附属・系属校推薦選抜を経て進学しようとする生徒は、(1) 努力の必要性を感じており、(2) 学習への意欲が高く、(3) 努力の指標としての学習時間も長いことが明らかにされた。私立大学の副学長を務めた土田(2008)は、「受験がない系列校の生徒は、ともすれば緊張感が薄くなる傾向がどうしても生じてしまう」とし、高校生が持つ緊張感を、「受験ストレスのような「負の緊張感」と「自分の知力や感性を磨く「正の緊張感」」に区分し、附属・系属校生徒の「正の緊張感」の必要性を述べていた。その定義をかりて考えると、校内における競争と選抜を意識化している推薦(選抜)ルートの生徒は「正の緊張感」持っていると解釈することができるだろう。

他方、大学入学者選抜を経る一般入試ルートを選ぶ生徒の場合は、学習時間は長いものの、その学習時間が、大学入試間際の追い込みと、塾に行くことで規定されていた。私立X大学の附属・系属校卒業生の進学先を確認してみると<sup>(23)</sup>、附属・系属校に在籍しながら一般入試を目指す理由は主に積極的なものと消極的なものの2つに分類できると思われる。まず積極的な理由として、系列大学より受験偏差値の高い大学を目指す場合と系列大学にはない専門を希望している場合が挙げられる。他方、消極的な理由としては、主に内部選抜が行われる学校において、本人の普段の学業成績では内部進学が望めず、結果として一般入試を選択せざるを得ない場合である。いずれにせよ、彼(女)らの学習時間数の変化は、進学校を対象とした先行研究(濱中2016)においても同様に見られるものであり、附属・系属高校の生徒であっても、内部における競争・選抜を経る生徒と、外部での競争選抜を経る生徒では、生徒の意識と学習行動が異なると考えられる。

最後に、推薦(全入)ルートの生徒は、ほかのルートの生徒と比べ、大学進学への緊張感が薄く学習時間も短いものの、教科学習への意欲も教科内容を面白いという気持ちも持っていた。先行研究で提示された学力不問入試が高校生の学習意欲に負の影響を与えることについては、本稿が対象とした生徒には当てはまらないように思われる。これまで、附属・系属高校の生徒を対象にした研究がなされなかったため、彼(女)らは「推薦入試組」として一括りにされ、「学習意欲の低さ」や「学力不足」の脈略で語られてきた。確かに、彼(女)らの学習時間は、同じ附属・系属高校の他のグループより短いものではあったが、平均して1時間を超えており、受験が迫る3年次の勉強時間を除けば、濱中(2016)が調査した進学校の勉強時間とさほど変わらない。



「正の緊張感」を持ち、学習への意欲も高く、学習時間も長い、推薦（選抜）ルート of 生徒が「のぞましい」高校生の姿かもしれない。しかし、選抜（全入）ルートの生徒が、「選抜」がないにも関わらず、学習意欲を持ち勉学に励んでいる様子を示せたのは本研究の大きな成果だと考える。

このように本研究では私立大学の附属・系属高校の大学進学ルート別に生徒の学習意識や学習行動を検討した。これまでの高大接続研究では、高校ランクや、社会階層、個人の成績など、言い換えれば、何らか階層の差異に着目し、生徒の学習行動との関係を検討してきたと考えられる。しかし、選抜性の高い私立大学附属・系属高校における複数の大学進学ルートに着目することで、ほぼ同じ階層に属する生徒が通ろうとする大学入学のための選抜の差異が、生徒の学習行動に与える影響について検討することができた。これら知見は、今後の「大学全入時代」における高校生の学習意欲・学習行動を検討していく上で、示唆を与えるものであると考える。今まで顧みられていなかった私立大学附属・系属高校を対象とした研究により、「大学に進学する」ことがある程度約束されている高校生でも学習意欲や教科学習へのモチベーションが維持されているという知見は、単なる特殊事例から得られた結果に留まらず、今後の高大接続のあり方を考える上で必要かつ有用であると考えられる。

しかしながら、本稿には残された課題も多い。本稿は、私立大学附属・系属高校の大学進学ルートに着目し、複数の附属・系属高校をまとめて検討してきたが、その学習意欲が、附属・系属高校入学時に「選抜」を経た彼（女）らにもともと備わっている素質なのか、附属・系属高校での学びによる効果なのかについて、本研究では明らかにすることができなかった。その解明には、それぞれの附属・系属高校で行われている教育にも着目し、各附属・系属高校における生徒の学習経験や、学校内外での学習活動が、各高校の生徒の学習意欲や学習行動に与える影響について検討することが不可欠であると考えられる。他方、系列大学の選抜性、つまり受験偏差値が高くない私立大学の附属・系属高校の場合、今回の対象であった附属・系属高校と同じような進学ルートが用意されているとしても、必ずしも同じ傾向が確認できるとは限らない。十分な内部進学制度が確保できているにも関わらず系列大学への進学の割合が低い学校において、内部進学制度が生徒の高校生活に及ぼす影響は本論文の知見では説明されない可能性も否めない。これらを今後の研究の課題としたい。

## 付記

本論文は、早稲田大学教育総合研究所研究部会「グローバル時代における高大接続に関する研究：大学附属校・系属校を対象として（代表：吉田文）」（2019年度：B-11、2020年度：B-3）、および「私立大学附属高校が大学進学者にもたらす影響に関する研究—高大連携教育と内部進学制度に着目して—（代表：吉田文）」（2021年度：B-10）の研究成果の一部である。

## 注

- (1) ここでいう大学進学ルートとは、校内選抜や大学入試選抜などの大学進学方法やそれに向かう「道筋（ルート）」を意味するものとして使う。これは荒井（1998）を参考にした。

- (2) 『首都圏 私立高校 大学附属校ガイド 2020年度用』を参照した。
- (3) 『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～（答申）』（中央教育審議会 2014）を指す。
- (4) 別のパネル調査（東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 2019）でも、偏差値65以上の大学に進学した生徒の学習時間が、1年生で約1.3時間、2年生約1.4時間、3年生3時間と、3年生になって学習時間が倍増するという同様の傾向を示している。
- (5) 本稿では、附属・系属高校との連携関係がある特定の大学を系列大学とする。
- (6) 附属・系属高校ホームページで、系列大学への進学実績（割合）を公開していることもある。
- (7) どのような生徒が、系列大学への推薦進学を希望するか、系列大学の入学難易度に影響されると考えられる。系列大学の入学難易度が高い場合は、成績上位層が附属・系属校推薦を希望し、成績下位層が一般入試等に進み、系列大学の入学難易度が低い場合は逆に、成績上位層が一般入試等を希望し、成績下位層が附属・系属高校推薦を希望するとも考えられる。
- (8) 附属・系属高校の生徒の進学ルートは、この3つに限らず、多くの高校の生徒が選択するような指定校推薦、AO入試などの選択肢もある。しかし、本研究では、主に附属校推薦（全入および選抜あり）と一般入試を比較するためにこのような3つの大学進学ルートを対象とすることとした。
- (9) 進路に関してトラッキングという用語が使われることがあるが、本稿では個々の生徒の希望する大学への進学方法から、大学進学ルートを使う。
- (10) 晶文社学校案内編集部（2019）では、系列大学の選抜性と内部進学率にある程度の関連が見られる。
- (11) 附属・系属高校への他の進学理由は、「自分に合った学力、偏差値」33.2%、「学校の知名度、伝統」22.7%などであった。
- (12) 3つの大学進学ルートの人数は、推薦（全入）2,163人、推薦（選抜）は652人、一般入試は413人であった。学年等の変数に欠損値があれば、分析対象人数が変わる。
- (13) 「第一希望の大学へ進学するためには、勉強などをもっと頑張らなければいけないと思いますか。」という問いに「そう思わない」から「とてもそう思う」の4件法（および「わからない」）の選択を求め、「そう思う」「とてもそう思う」を選んだ生徒の割合を示している。附属・系属高校から系属大学への推薦においては、学業成績以外についても考慮されることもあると考えられること、また現状の努力では不十分だと考えているかを確認するために、質問文は、「勉強などをもっと頑張らなければいけないと思いますか」とした。
- (14) 希望学部に関して、カイ二乗検定を行った結果、グループ別では $t=131.826$ ,  $df=2$ ,  $p<.001$ で有意であった。推薦（全入）ルートの学年別では $\chi^2=28.902$ ,  $df=2$ ,  $p<.001$ で有意であった。
- (15) 教科学習への意欲に関して、カイ二乗検定を行った結果、グループ間では $\chi^2=8.948$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ 、各グループの学年別では、推薦（全入）は $\chi^2=3.052$ ,  $df=2$ ,  $n.s.$ 、推薦（選抜）は $\chi^2=4.231$ ,  $df=2$ ,  $n.s.$ 、一般入試は $\chi^2=2.062$ ,  $df=2$ ,  $n.s.$ であった。
- (16) 大学進学への努力と教科学習への意欲の相関係数は、推薦（全入）は.115<sup>\*\*</sup>、推薦（選抜）は.013、一般入試は.102<sup>\*</sup>であった。
- (17) 教科学習への意欲について、各グループの平均値、標準偏差を確認したところ、推薦（全入）は $M=2.87$ ,  $SD=.750$ 、推薦（選抜）は $M=3.06$ ,  $SD=.740$ 、一般入試は $M=2.71$ ,  $SD=.802$ であった。
- (18) 教科内容の面白さに関して、カイ二乗検定を行った結果、グループ間では $\chi^2=22.200$ ,  $df=2$ ,  $p<.001$ 、各グループの学年別では、推薦（全入）は $\chi^2=5.311$ ,  $df=2$ ,  $p<.1$ 、推薦（選抜）は

- $\chi^2=8.081$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ , 一般入試は $\chi^2=.653$ ,  $df=2$ ,  $n.s.$ であった。
- (19) 平日、土・日とも「あなたはふだん、学校での授業以外に1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めてください。」と示し、「0時間」から「6時間以上」の7件法で回答を得た。
- (20) 週1回以上、学習塾に通っている生徒の割合は、推薦（全入）は24.1%、推薦（選抜）は33.5%、一般入試では49.4%であった。
- (21) 性別、学年以外は、4件法で回答を得た。
- (22) 推薦（選抜）ルートでは、平日の $R^2$ 値が他と比較しても小さいことから、平日の学習時間を規定する他要因があるものと推定される。
- (23) 各附属・系属高校のウェブサイトで開催されている進学先情報によって確認した。

### 参考文献

- 荒井克彦, 1998, 「高校と大学の接続—ユニバーサル化の課題—」『高等教育研究』第1集, pp.179-197.
- 荒牧草平, 2002, 「現代高校生の学習意欲と進路希望の形成—出身階層と価値志向の効果に注目して—」『教育社会学研究』第74集, pp.5-23.
- 有海拓巳, 2011, 「地方／中央都市部の進学校生徒の学習・進学意欲—学習環境と達成動機の質的差異に着目して—」『教育社会学研究』第88集, pp.185-205.
- おおたとしまさ, 2016, 『大学付属校という選択—早慶MARCH関関同立』日本経済新聞出版.
- 濱中淳子, 2016, 「高大接続改革と教育現場の断層—「善意」の帰結を問う—」『教育学研究』第83巻4号, pp.29-40.
- 蒔谷剛彦, 2000, 「学習時間の研究—努力の不平等とメリトクラシー」『教育社会学研究』第66集, pp.213-230.
- 中村高康, 2000, 「推薦入学の現状—「推薦入試」化と大学の構造変容」『現代の高等教育』416, pp.40-45.
- 中村高康, 2011, 『大衆化とメリトクラシー—教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス』東京大学出版会.
- 中村高康, 2012, 「大学入学者選抜制度改革と社会の変容不安の時代における「転機到来」説・再考」『教育学研究』第79巻第2号, pp.53-62.
- 西丸良一, 2015, 「誰が推薦入試を利用するか—高校生の進学理由に注目して」中澤渉・藤原翔編『格差社会の中の高校生』勁草書房, pp.68-80.
- 晶文社学校案内編集部, 2019, 『首都圏 私立高校 大学附属校ガイド 2020年度用』晶文社.
- 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所, 2019, 『「高校生活と進路に関する調査2018」ダイジェスト版』, ベネッセ教育総合研究所.
- 土田健次郎, 2008, 「中高系列化の意味と課題」『大学時報』No.323, pp.40-43.
- 安田賢治, 2021, 「付属校の「内部進学力」」『東洋経済』10/30号, pp.80-81.
- 山村滋・濱中淳子・立脇洋介, 2019, 『大学入試改革は高校生の学習行動を変えるか—首都圏10校パネル調査による実証分析—』ミネルヴァ書房.
- 吉田文, 2011, 「大学と高校の接続の動向と課題」『高等教育研究』第14集, pp.169-181.